

立 一 法 人化と将来 一

金研は今年、百周年を迎え、5月 21日の創立記念日には様々な方面か ら来賓の方々をお招きし記念式典を行 うことができた(写真1)。本多光太郎 先生が臨時理化学研究所第二部とし て本所を開かれてからこの間に流れた 月日は、幾重にもわたる研究活動の変 遷を軸として、現在も所の教職員に材 料科学に携わる者としての誇りと責任 を無言のうちに語りかけてくれている。 小職は百周年記念事業委員会を統括 する立場にあったこともありこの原稿の 依頼を受けたが、まだ現役の研究者 でありとてもこのコラムに寄稿できるだ けの器ではない。しかし一方で、特に 七十五周年記念事業以降に訪れた本 所の変化を記すことも大切であると思 い、また諸先輩の方々がおられた時代 との相違を対比することも必要と感じ、 執筆をお受けした次第である。なお、 各部門の研究内容や組織の詳細につ いては現在編纂中の百周年記念事業 誌をご覧になっていただきたい。

## ○国立大学法人化の波紋

ご存じのように本所は1987年に全国共同利用研究所として改組され(\*1)、これは同時に多くの部門の改称や運営協議会の設置など、組織・運営面での改革を伴ったものであった。1991年には七十五周年を迎え、さらにこの時期、2号館や3号館の竣工など、施設・組織面で大きな飛躍がみられた。これは一重に所の運営に携われた先生方の指導力の賜物であり、改めて敬意を表さずにはいられない。

一方、この直後から日本はバブル崩壊という言葉に象徴されるように大きな転換期を迎えた。橋本内閣が行政改革という御旗の下で国家公務員20%削減を狙った国立大学の法人化案を打ち出したのが1997年。国立大学協会などの反対を受け、いったんは見送られたものの2001年にはまず独立行政法人通則法が施行され国立博物館等の機関が相次いで独法化、小泉内閣の下で出された遠山プランに対して

も大学側は有効な反論を出せないまま 2003年7月には国立大学法人法案が 国会を通過、本学も翌年4月から国 立大学法人となった。米国などでは国 立・私立を問わず大学の法人格は尊 重されているが、それは大学の持つべ き主体性の確保に国家の干渉はなじ まないという基本的な考え方が社会に 広く浸透しているからである。翻って僅 か5年という短期間になされた日本に おける大学の法人化は、組織業務・ 人事制度・目標評価・財務という四つ の観点から改革を謳っていたが、大学 の教育・研究活動そのものが中期目標 の設定と評価による文部科学大臣の 認可事項となったことなど、当初の思 惑とは裏腹にその後の大学の運営に 大きな負担を強いているものではない だろうか。紙面の都合もあり財政にの み言及すれば、当初、運営費交付金 は「法人化前の公費導入額を十分に 確保し、...」と謳われていたにもかかわ らず、財務省と文科省は早や2005年 から独立行政法人と同様に効率化係 数を適用したのである。(この係数は 2016年現在、1.6%に至っている。) 換言すると10年経てば物件費と人件 費を含めた予算が例外なく自動的に一 割減るということである。また法人化と は前後するが2001年に本所に任期制 がひかれ、組織から個々の研究者にい たるまで業績評価が日常的に行われる 時代となった。

## ○時代を読み、体現化する組織として 一今求められる本多スピリットー

このような大きな流れの中で、附置研究所は法令ではなく国立大学法人が自主的に設置改廃できる研究組織となったと同時に、我国の学術研究の中核的研究拠点としてその使命を新たなものとしている。金研も法人化に際して、4部門が名称変更、附属材料試験炉利用施設が量子エネルギー材料科学国際センターと装いを新たにした。また以前にも増して様々な形での外部資金の導入は必須事項となり、一方で組織の改廃が自由になり、研



写真1: 百周年記念式典の様子。340名ほどの所外関係者が参列し、盛大に執り行われた。

究者が自ら研究に必要な組織を考え、 設置し、運用していく時代となった。その ような意味では社会の動向を先取りし、 体現していく本多スピリットが強く求めら れている時代とも言える。

基礎学問としての研究を横糸とすれば、 目に見える形での応用は縦糸である。工 学分野において機械系や電気系は比較 的出口に近いのに対し、材料系における 研究は学術的側面が強く、実用化の際 にも用いられる機能を目に見えないところ で支えるという要素が大きい。本所におい て横糸となるのが伝統的な研究部門であ り、縦糸が出口を目指した特に工学系の センターである。1987年に設置された新 素材開発施設はそのような目的指向の組 織であるが、この間、幾度の改組を経て、 現在は新素材共同開発センターとして機 能している。さらに時代の要請を反映して 2010年に設置された低炭素社会基盤材 料融合研究センターは異分野に所属する 研究者間の融合に大きく貢献したのち発 展的に廃止、2015年には新たに先端エ ネルギー理工共創研究センターが発足し、 エネルギー材料という明確な出口に焦点 を絞った研究活動を行っている。

また国際化と産学連携はどの分野にお いてもキーワードとなっているが、本所に おいても2002年に設置された材料科学 国際フロンティアセンターが2008年には 国際共同研究センター (ICC-IMR)と発 展し、外国人研究者の受入れだけでなく セミナーや国際ワークショップの開催など を通して国境を超えた研究体制を推進す る大きな力となっている。一方、2006年 に金属系中小企業数ではトップである大 阪府との連携と企業支援を主たる目的と して大阪センターが設置された。この組 織は関西センター(2011年)を経て、産 学官広域連携センター(2016年)として 現在も継続しており、ものづくりビジネス センター大阪 (MOBIO) における技術相 談、ものづくり基礎講座等のセミナーな ど息の長い活動を続けている。

## ○震災、そして記念業事委員会の発足

こういった中、2011年に起こった東日本大震災は本所にも甚大な被害をもたら



写真2: 改装された2号館講堂。金研を象徴するように、金属をコンセプトにしたデザインとなった。

した。2号館会議室は二日間にわたり臨時宿泊施設となり、講堂は一か月以上、災害対策本部として機能した。そこで毎朝、所員全員でミーティングを行った後、各々の現場である研究室等に向かい、黙々と倒れた装置などの復旧にあたった。幸いにも人的被害はなく、時間は要したが研究活動は完全に復帰している。一連の経験は我々の心に自然の脅威が決して他人事でないこと、安全と安心を確保することがいかに重要かをしっかりと焼きつけてくれた。

振り返ると、この震災の年の5月に第 一回百周年記念事業委員会が開催され たのであった。新家光雄所長(当時)のも とに高梨弘毅先生(現所長)を委員長とし て出版、式典行事、広報、募金を所掌 する委員会が設置された。この事業には いくつかのフェーズがあり、まずウェブサ イトを開設し、ロゴマークを決定した。こ のロゴマークは一般の方のデザインによる もので、詳細は出版委員会が主体となっ て刊行した「片平の散歩道 金研百年の 歩みとともに」(河北選書)に記載されてい る。また「金属材料研究所研究教育助 成基金」として寄附を募ることとした。記 念事業に直接かかわるものだけでなく、 将来的に若手研究者の育成につながる 基金を設置しようというのが趣旨である。 また委員会では百周年に相応しい企画は 何かという議論を繰り返し、講堂の改修 を記念事業の一環と位置付けることとし た(写真2)。より広く高くすることである 程度の国際ワークショップでも余裕を 持って開催できるようにするとともに、1 号館から2・3号館を一階で結ぶ動線を 確保し、さらに社会貢献が問われる時代、 一般の方々でくつろげるロビーを作り、そ こを現在の研究活動の紹介を兼ねたパ



写真3: 歴代の発明品を展示している資料展示室。リニューアル後は頻繁に見学者が訪れる。

ネルや映像を観られるオープンスペースとするというのが骨子である。他にも本多記念館の資料室(写真3)や1号館ロビーの改修などがなされ、本所は装いを新たにした。

2015年10月に百周年記念事業のプ レイベントとして位置づけられた片平まつ りでは、一足早く使用可能となったロ ビーに5000名を超える一般市民の方々 が訪れ、身近に潜む材料科学を体験し ていただいた。2016年5月18-20日には Summit of Materials Science (SMS) 2016 が新しい講堂で開催され、所内若 手研究者の講演を皮切りに、13名の海 外研究者と8名の国内所外研究者が集 まって、熱い議論が交わされた。そして 5月21日の創立記念日の記念式典にい たったのである。式典では行政をはじめ とする諸機関からの来賓の方々のご祝辞 を受け、続く記念講演会ではペーター・ グリュンベルグ先生、佐川眞人先生から 貴重なご講演を頂戴し、産官学多方面 から300名以上もの参加者が一堂に会 した祝賀会と、盛況な一日であった。

金属材料研究所の百年を振り返ると 誰しもが歴史の重みを感じてしまう。しか し、我々は歴史家ではなく研究の当事者 である。その重みにつぶされることなく、 巨人の肩の上に立って(Standing on the shoulder of giants (\*2))という謙虚さ を忘れずに、次の百年に向けて走り続け ていきたいと思う。「今が大切」は時代を 超え、生き続けている。

<sup>(\*1)</sup> 金研物語の庄野安彦先生の記事(IMRニュース77号) 参昭

<sup>(\*2)</sup>アイザック・ニュートンが先人の業績の上に現在の我々がいることを指摘して述べたと伝えられる。

<sup>※「</sup>金研物語」は本号で最終回となります。今後は不定期連載として皆様にお届けいたします。ご愛読ありがとうございました。